―ハルシナイから上流の地名④―

断章
旭川のアイヌ語地名研究
(94)
高橋 基

今回は、新しい読者から**掲載地図**の「ニッネカムイサパ（鬼の首）」と「ニッネカムイ覆道」の説明をしてほしいとの要望もあり、「ハルシナイ上流の地名」の意味からも、再度の説明と、「アソナイプィラ」について解説をさせていただく。

安政四年（一八五七年）五月二十六日（陽暦六月十七日）に、松浦武四郎はこの地に来て、アイヌの人たちから、鬼神・魔神と言われたニッネカムイ（nitnekamuy）伝説を聞き、持参した野帳（フィールドノート）『巳第二番』に、その伝説の岩をスケッチした。**写真①**がそれで、**掲載地図**の左岸の「ニッネカムイ」の大岩になった「ニツニカモイ」が描かれ、右岸には神（サマイクルカムイ）に切られて飛んで行った、「ニツニカモイシャハ（**鬼の首**）」の岩が描かれている。この伝説を松浦武四郎は、報文日誌の『再篙石狩日誌』に次のように記述した。

「ニイツイカモイ―左（註・上流に向かって左＝右岸）の方、岸に、高さ二丈計（約六㍍）の人の首の如き岩有。是を**鬼の首**なりと云ふ。アイヌ等此前へ木幣を削て奉る。ニイツイと云ふは鬼の事也。カモイは神也。昔、鬼此処まで上り神と合戦をして、神に負けて切られし首なりと申し伝えたり。」

写真②は、「鬼の首」の現在の姿である。他方、左岸の「鬼の躰」について、松浦武四郎は、次のように記録している。

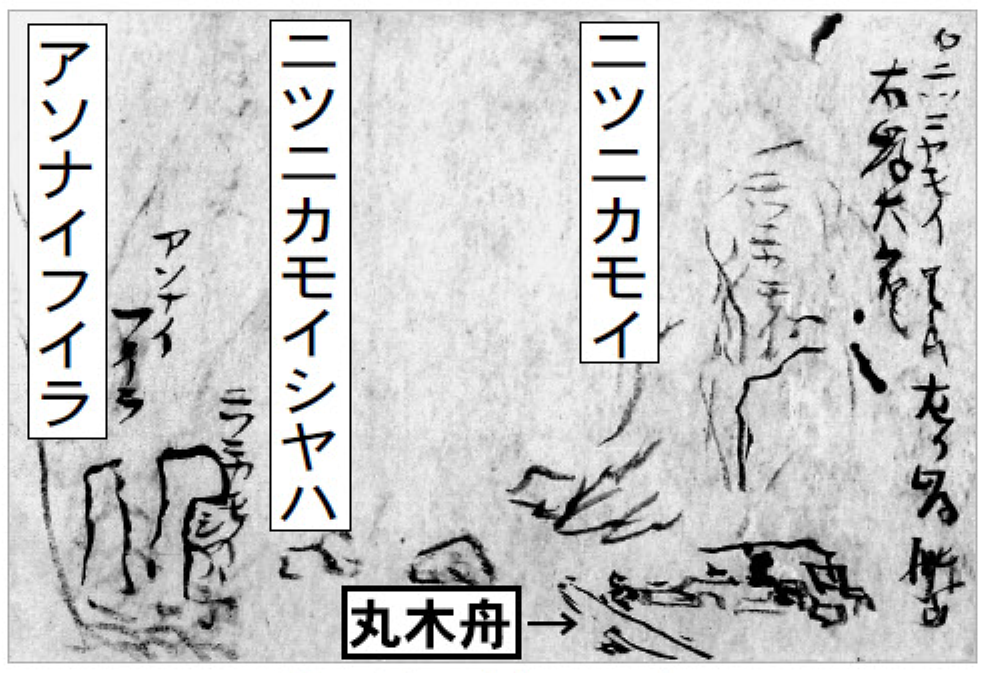
「カモイ子トバケ（nitnekamuy-netopake**鬼の・躰**）―山岸に高さ七八丈（約二十一、二十四㍍）の大岩一ツ有。是はニイツイカモイの躰の由也。子トバケは身と云事。此処も急流なるが故に、両人は岩の上え（ママ）乗り、四人にて棹さし引き上る也。」

松浦武四郎が見た「**鬼の躰**」の大岩は、国道十二号線の拡張工事で、破壊されるところを、**掲載地図**の「ニッネカムイ覆道」を作り、アイヌ伝説の大岩が辛うじて保存された。**写真③**は下流から見た「鬼の躰」の遠景。**写真④**は、上流側から見たもので、下の道路が旧道である。**写真⑤**は、対岸から見たもので、「ニッネカムイ覆道」によって、「鬼の躰」の大岩の姿が残されたことがよく分かる。（この項は、当連載の(65)(67)(76)を参照下さい）

さて、次に、「アソナイプィラ」については、松浦武四郎は次のように述べている。

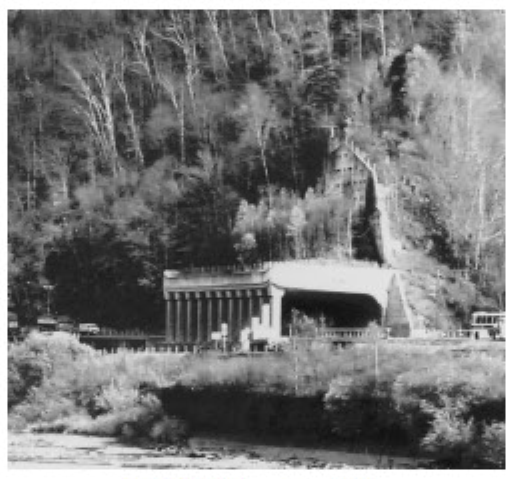
「アソナイブイラ―アソナイの三十間（約五十五㍍）計前に大岩突出し居るに、水打附浪立を云。プイラは浪立事也。」

松浦が記述したように、プィラ（puyra）は浪立つことで、丸木舟の難所である。知里真志保は、『地名アイヌ語小辞典』で、「puyra プィラ→渦巻の群在する水面。渦汐（うずしお）。激湍（げきたん）」と説明している。湍は早瀬の意味で、激湍＝激流の意味である。



①『巳第二番』

②鬼の首


③鬼の躰

④鬼の躰

⑤鬼の躰

右の松浦の書いたアソナイブイラと前述のカモイ子トバケは、ペンケアソナイの後に書かれていて前後が混乱しているが、松浦の野帳のスケッチと現状から**掲載地図**のように位置を特定した。

なお、ハルシナイ（現・神居第四線川）から、上流のオンネナイ（現・神居第一線川）までの約七㌔の石狩川の流れに、松浦武四郎の記録を見ると、アソナイプィラのように名前のついたプィラ（波立つ激流）が、**掲載地図**の三カ所の他、合計五カ所ある。カムイコタンの上流は、上川のアイヌの人たちでなければ丸木舟を操舟できないと言われた所以である。次回はそのプィラ（浪立つ激流）の代表のレーコロプィラ（re-kor-puyra 名前・を持つ・激流→有名な激流）を紹介する。（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します